

令和7年度個別学力検査
問 題 訂 正

小論文
(後期日程)
教育学部

注 意 事 項

1. 試験開始まで、この問題訂正紙の裏面を見てはいけません。
2. 「解答はじめ」の指示の後に裏返しなさい。
3. 試験終了後、この問題訂正紙は持ち帰りなさい。

令和7年度個別学力検査問題訂正

教科・科目名	小論文 教育学部
--------	----------

次のとおり問題を訂正してください。

〔後期日程〕

問題訂正

1 ページ 2 行目

(誤) . . . 本文の抜粋・要約と引用とからなるものです. . .

(正) . . . 本文の抜粋・要約からなるものです. . .

令和7年度入学試験問題

小論文

(後期日程)

教育学部

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この問題冊子は5ページあります。
3. 解答用紙は3枚あります。すべての解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。受験番号が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
4. 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入ください。
5. 下書き用紙が1枚あります。
6. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁及び汚損等がある場合には、手を挙げて監督者に知らせください。
7. 試験終了後、問題冊子及び下書き用紙は持ち帰りください。

以下の【文章 A】と【文章 B】を読み、問1～問3に答えなさい。なお【文章 B】は、本文の抜粋・要約と引用とからなるものです。また、【文章 A】【文章 B】ともに設問の都合上、一部表記を改変しています。

【文章 A】

まだ幼い頃は、誰もが限定された関係のなかに自分の存在をつくりだしている。はじめは母親との関係がすべてだったといってもよいかもしれない。ところが成長するにつれて、結んでいく関係の世界がふえていく。母親以外の他の家族との関係もつくられていくし、次第に家族以外の人々との関係も手にしていくことになるだろう。太陽の光や身体で感じる風などをとおして、自然との関係も生まれていく。人間の成長の過程は、関係の拡大なのである。そのなかには文字との関係や本との関係も含まれる。なぜなら文字や本をとおして、直接関わってはいない世界と関係をもったり、自分が関わっている関係の世界をあらためてとらえなおすことができるからである。

だからもしも成長とか教育という言葉を使うのなら、それは子どもたちの生きていく関係が広がるように応援することでなければならない。日本の学校教育のように知識を教え込むだけでは、歴史と自己との関係をもつこともなく、歴史を知ることが自己の存在をいかに拡大していくのかということに気づかないままに年表を丸暗記するようなもので、そんなものは試験という必要性がなくなればたちまち忘れてしまう。

とすると勉強の方法には、さまざまな方法があってもいいはずだ。自然との関係を拡大する過程で学んでいくことがあってもいいし、社会との関係を拡大しながら学んでいってもいい。教育とはそれを応援することである。ピレネーやパリ郊外の子どもたちのように(注1)、役割をふやしながらか自分の生きる世界をつかみとっていてもいい。

(中略)

現代社会においても、人間たちがさまざまなものと関係をもちながら生きていくことに変わりはない。ところがその関係の相手は、その多くが間接的なものになっている。世界経済の不安定化が自分の暮らしや労働にも影響し、にもかかわら

ず世界経済のこれからを正確に予想できる人は誰もいないというのが、今日の状況である。直接的な関係から間接的な関係に変わっただけでなく、関係の対象がとらえられなくなったのである。見定めることのできないものと関係を結びながら生きているのが、今日の私たちの状況である。

この時代が教育にも反映している。学んでいる者たちからみれば、見定めることのできない目標に向かってカリキュラムが組まれ、子どもたちはそのカリキュラムと関係を結ぶことになる。唯一現実感があるのはいずれ関わらなければならなくなる受験のみで、それだけが学習に現実感を与えてくれる。

経済の本質は見定められないのに、お金や収入、消費といった現象だけに現実感がある。それと同じように、教育の本質はわからなかったとしても、受験やそのための成績といった現象にだけ現実感が生まれる。今日の時代においては、さまざまな領域において、根本的なことは見定められないのにその結果現われてくる現実には振り回されるのである。

この状況の下では現われてくる現実には圧迫されながら、根本のわからない世界に人間たちは取り込まれていってしまう。とすると今日の課題は、見定められない関係に包まれて生きる世界を、とらえられる関係を軸とする世界に変えていく試みとともにあるといってもよい。

ピレネー山中の村の子どもたちは、自分がどんな関係のなかで生きているのかを知っていた。その関係のなかに自分の役割があることも、自分の仕事をもっていることで有意義な人間として関係のなかに存在の場所をつくりだしていることも知っていた。だから親たちは子どもに仕事を与え、ともに生きる関係の世界のなかの一人前の人間として扱っていた。そして人間の成長は、子どもたちが次第に獲得していく関係の広がりとともにあったのである。

(内山節(2015)「個の成長というしほりを超えて」『内山節著作集 11 子どもたちの時間』

農山漁村文化協会より)

注1…「ピレネーやパリ郊外の子どものように」

筆者はパリ郊外の子どものたちも同様であったことを別の箇所述べている。

【文章 B】

〔以下は筆者が世界価値観調査のデータに基づいて、1980年代の初回調査と2010年近くの最新回調査とを比較し、20-24歳の年齢層を対象をしぼって分析した結果、経済成長を完了した「高原期」^(注2)の多くの諸国において明確に大きい変化のみられた3点についてまとめたものである〕

- ① 「ここに、家庭で子どもに身につけさせることのできる性質が列記されています。この中で、あなたが特に大切だと思うものを5つあげて下さい」として、11の価値の項目^(注3)を提示するもののうち、多くの高原期諸国において共通して大きく増大している価値は以下のように「寛容と他者の尊重」だった。

フランス 60 → 86 %、ベルギー 40 → 81 %、デンマーク 60 → 89 %、ノルウェー 29 → 92 %、西部ドイツ 52 → 72 %、イギリス 58 → 72 %、スウェーデン 71 → 79 %、アイスランド 59 → 87 %、オランダ 62 → 74 %、ルクセンブルク 59 → 87 %、アメリカ 51 → 66 %、カナダ 50 → 87 %、日本 45 → 74 %

- ② 「寛容と他者の尊重」という価値の増大と関連して、「利己的でないこと」という価値も、多くの高原期諸国において、増大している。

フランス 18 → 36 %、デンマーク 35 → 73 %、ノルウェー 9 → 24 %、オランダ 14 → 28 %、カナダ 19 → 48 %、アメリカ 27 → 35 %

- ③ 他方で、「仕事にはげむ」「決断力・ねばり強さ」という一見、「寛容と他者の尊重」「利己的でないこと」という価値の強調とはいくらか異なった精神風景を思わせる価値の強調もまた多くの高原期諸国の青年たちの間で、増大している。

「仕事にはげむ」

フランス 21 → 48 %、イギリス 15 → 46 %、オランダ 3 → 40 %、アメリカ 19 → 66 %、カナダ 19 → 59 %

「決断力・ねばり強さ」

フランス 22 → 44 %、西部ドイツ 28 → 62 %、イギリス 19 → 34 %、ノルウェー 6 → 33 %、アメリカ 17 → 35 %、カナダ 25 → 55 %

この①～③のデータを筆者は次のように解釈している。

高原期諸国の青年たちの価値の重点のこのような動向にはこれまでの「現代若者

論」の言説においてよく見られた、「仕事思考からあそび思考へ」というような青年像とは少し異なった方向性を見ることができる。そこにわれわれが見るべきものは、むしろ「仕事」そのもののイメージの変容であるように思われる。「寛容と他者の尊重」「利己的でないこと」の重視という大きい方向と統合して考えてみると、それはたとえばホモ・エコノミクスの、「かせぐための仕事」「成功のための仕事」というイメージから、「社会的な〈生きがい〉としての仕事」、共存の環としての仕事というような、重心の変容があるのではないかと思われる。

(見田宗介(2018)『現代社会はどこに向かうか—高原の見晴らしを切り開くこと』岩波書店より)

注2…著者は物質的な成長を続けていくのではなく、そうした成長を完了し、降ることなく永続している安定平衡の状態を「高原」にたとえている。

注3…1 自主性 2 仕事にはげむ 3 責任感 4 想像力 5 寛容と他者の尊重 6 節約心
(お金や物を大切にする) 7 決断力・ねばり強さ 8 信仰心 9 利己的でないこと
10 従順さ 11 自己表現力

問1 【文章A】の下線部「今日の課題は～試みとともにある」は筆者の結論です。

この結論が正しいとした場合、教育の場合であれば、その課題はどのような現状に対して、何を試みることになるのか、具体的に150字以上200字以内で答えなさい。

問2 【文章B】の筆者のデータ解釈が正しいとした場合、③で筆者はともに増大している項目「仕事にはげむ」「決断力・ねばり強さ」と「寛容と他者の尊重」「利己的でないこと」とが一見、「いくらか異なった精神風景を思わせる」と述べています。なぜそう考えるのか70字以上100字以内で述べなさい。

問3 【文章A】と【文章B】のそれぞれの筆者の主張が正しいとした場合、教師であるあなたは、学校での教育の場で、子どもたちに生きがい(人の役に立っているなど)を感じさせるにはどうしたらよいと考えますか。あなたの考える教育活動(各教科の授業や学活、学外での活動、家庭での教育とのつながりなど)を具体的に600字以上700字以内で答えなさい。

なお、この試験問題は、文章の読解力、論理的思考力、かつ適切な文章構成力などをみるものであって、あなたの思想や信条を問うものではありません。